

キリスト教神学における歴史認識 —ラインホルド・ニーバーによる宗教改革思想の捉え方—

Views on History in Christian Theology: Reinhold Niebuhr's Perspective about the Reformation

佐久間 重
Atsushi SAKUMA

本論は、ラインホルド・ニーバーが彼の著作『人間の本性と運命』の中で宗教改革の思想をどのように解釈しているかを詳述したものである。ニーバーの解釈を通じて、キリスト者ではない人にとっては同じものとして捉えられる宗教改革の思想にも、ルター思想とカルヴァンのものとは違いがあることを明らかにすることを狙いとしている。ニーバーに依ると、ルター思想は神の恵みの中での赦しを強調するために、行動のないことの義に退化するところがあり、カルヴァンの思想は、律法に厳密に従うこととして罪の浄化を捉えるという特徴がある、と述べている。キリスト教が今日でも関連性を持つためには、両者の思想とルネサンス思想を統合することである、としている。

This paper deals with Reinhold Niebuhr's description about the Reformation in his famous book, *The Nature and Destiny of Man*. As the Reformation seems to be consisted of one single thought for non-Christian people, it may be useful to show how Niebuhr describes the Reformation in detail, especially his ways of understanding Luther and Calvin. According to Niebuhr, Luther emphasizes forgiveness in grace and lapses into mystic doctrines of passivity, while Calvin thinks of sanction as a rigorous obedience to law. Niebuhr insists that the Christian faith can have relevance to contemporary culture if Christianity can have a synthesis of the Reformation and the Renaissance.

キーワード：恵みの意味、ラインホルド・ニーバー、宗教改革、マルティン・ルター、ジャン・カルヴァン
meaning of grace, Reinhold Niebuhr, Reformation, Martin Luther, Jean Calvin

I. はじめに

本論では、これまでに引き続きラインホルド・ニーバーの思想を取り上げ、彼の歴史の見方、つまりキリスト教神学者として歴史をどのように解釈しているかを紹介することにする。^{注1)} プロテスタントの神学者と

してのニーバーの視点からすると、プロテスタントの源流となったマルティン・ルター(1483~1546)とジャン・カルヴァン(1509~1564)の思想の中で論じられている歴史の捉え方がどのように理解されるかを取り上げることにする。社会生活に対するキリスト者の取

り組みについて、ルターの見方の大きな特徴は、個人的で内的赦しを追い求めるために、社会的悪に対しては静観の態度、つまり敗北主義的になることであり、カルヴァンの見方の特徴は、社会道徳との取り組みに逃げ腰になることを克服しようとする余り、新たな道徳主義の押しつけ、つまり超道徳主義になることであるとしている。以下ではラインホルド・ニーバーの論述に沿って詳しく紹介することにする。^{注2)}

Ⅱ. 宗教改革思想における人間の運命についての議論

1. 宗教改革思想の位置づけ

20世紀のキリスト教が抱える思想状況の混乱を分析すると、宗教改革思想を再検討する必要があるという前提に立ち、ニーバーは、宗教改革の思想がキリスト教思想史の中で重要な位置を占めていることを指摘する。宗教改革により、人間は罪の永続性をより自覚するようになり、神の恵みの中で人生の最後の完成があることを福音により理解するようになった。人間の中にある力としての恵みと、人間を超えた力としての恵みという聖書の逆説を宗教改革は打破しようとしたところがあったことをニーバーは明らかにしている。ただ、宗教改革の思想は、恵みについての聖書の二面的解釈に忠実であろうとしていたことも念頭に置くことが必要であり、さらに、この問題についてのルター派とカルヴァン派の取り組みに違いがあることを考える必要がある、としている。

2. ルター派の宗教改革思想

キリスト者の人生についての究極の問題についてのルターの取り組み方には、二つの特徴があったとして、ニーバーは、以下のように説明する。ルターの取り組みの第一の特徴は、義を求める努力によっても究極の平和は見出せないというルターの確信である。ルターは、修道院の完全主義を試みたが、失敗をし、「信仰による義」というパウロ的信条こそが律法からの解放をもたらすと考えるようになった。第二の特徴は、ルターの内的経験よりも歴史的観察から来たもので、教会における完全さというのは見せかけであり、それは自己の正当化の根源であるという信念である。これによりルターは、教会中心主義に反論するようになった。^{注3)}

ルターは、恵みとキリスト者の人生に関する理論を作り上げるに当たり、恵みが「愛と喜びと平和」の源

であるということを受け入れた。ルターは、神秘主義の伝統に関心を持ち、信仰者の魂は、キリストと一体となり、キリストの徳がその魂に入り込むと考えるようになった。^{注4)} ニーバーは、ルターの義の解釈の特徴を、義が神への愛と感謝の動機となることに求めている。この動機により、キリスト者は、同僚への感謝や不遜を超越できることになる。ここからキリスト者のアガペーの美しさや力が出て来るとルターは理解した。ルターは、信仰による新しい生活が新しい義をもたらすことを否定しない。信仰に身を捧げるキリスト者は、善い行いをするが、この善い行いによって人は神聖になるのではなく、信仰のみが神聖な人を作るのである、と言うルターの言葉をニーバーは重要視する。

ニーバーは、ルターの思想の中に、カトリックの古典的な教義にある恵みによる赦しの強調を見出す。魂は恵み無しでは何の成果ももたらさない。キリストを信じる人は、聖霊を受け入れ、これがあらゆるものを愛へと導く。ルターは、あらゆるものへの愛の可能性を論じる時に、キリストのアガペーが持つ深い意味を明らかにしている。ルターは、聖書にある山上の垂訓が示す倫理がキリスト者を定義しているとしている。ニーバーに依れば、ルターの考え方には、受け身の神秘主義に捕らわれるところがあり、静観主義と義の律法的解釈が結びつけられていることが見受けられる。ルターの言葉を解釈すると、「行動のないこと」の義に退化するところがある。神がキリストを通して人間に与える信仰の義とは、儀礼を守ることで、神の法の義でもなく、「受け身の義」である、とルターは述べている。すべての行動が罪に染まると言うことから来る、行動への神秘的な恐れが、ルターの中では行動への恐れとなっているのではないかと、というのがニーバーの意見である。ニーバーと同時代のスイスの神学者、エミール・ブルンナー(1889~1966)は、道義的な行動も大きな危険性を伴っている、と警告している。^{注5)} ニーバーは、そうした危険性は否定できないが、道義的な行動が抑制されると、宗教改革の神学は罪の汚れを恐れて、社会的責任を否定した修道院的完全主義と同様になってしまう、と批判する。

恵みについてのルターの分析の弱点は、恵みと律法との関係についての考え方にある。それは、義についての考え方ではなく、罪の浄化(sanction)についての考え方から来ている。ルターの見解に依ると、「愛と喜びと平和」は、救済された魂がキリストの中に見出すもので、歴史のあらゆる条件を超えることになる。

律法を完成させたとされるアガペーは、律法への義務感の消失をもたらすことになる。ブルンナーの解釈も、同様の結論を導き出している。ブルンナーは、「聖書の倫理が強調しているのは、無法に対する勝利ではなく、律法に対する戦いである」とし、「意識的に従うというのは、義務感からではなく、愛から来るものであり、自由は律法の束縛からの解放を意味する」と述べている。

宗教改革の思想の中では、個人的で内的な浄化を強調するために、義に内在する知恵を曖昧にするところがある、とニーバーは主張している。義の教義によると、魂の内的矛盾は克服されることがない。自己愛と神の愛との矛盾が克服される時には、人は有頂天になるが、この瞬間は救済された人の人生の一般の条件を表したものではない。この条件の中では、律法と恵みはより複雑になっていて、恵みが喚起されることで、律法が克服されることもある。悔い改めや信仰は、人生の広い範囲に向けて義務感を生み出す。隣人の必要性は、ある日、認識されなくとも、次の日には求められることもある。人には絶えず増大する義務感が生まれ、それが恵みの人生の中心部分となる。これを否定することは、人が歴史的存在であるという一つの側面を忘れることになる。この点を、ルネサンス思想は深く理解していて、人生に無限の可能性の連続を認めた。この認識に従えば、人生の完全な成就是あり得なくなる。ルター思想の中にある律法と恵みとの関係は、律法不要論(antinomianism)に導くことにはならないが、相対的な道義論に無関心なところがある。ルターの考えに依ると、道義的経験の極みでは道義的緊張は緩められないが、中間段階では緩められることになる。ここでは良心の不安から義の拡大へと人間は導かれるが、ルターは、この義の拡大について強い関心を示さなかった。

律法と恵みの問題を論じる際のルター思想の弱点が、人間の内的生活から複雑な社会生活に論点に移る際の一層明らかになる、とニーバーは指摘している。つまり、ルター思想には、社会生活での義の確立に熱心でないために、社会的道義に対して敗北主義的なところがある。ルター思想では、人間の知識をどんなに伸ばしても、神を知る知恵にはならず、信仰によって理解される恵みが尊重され、それが人間の知識を持つ罪深い自己中心性を克服する、とされている。そのため、真理を求めて努力する科学や哲学が打ち出す様々な側面には興味を示さない。文化的歴史の積み重

ねの中で究極の真理が得られるとするルネサンスの考え方は、幾らかの間違いを含んでいるとしても、宗教改革の思想と比較すると、真理への責務を真剣に考えている。真理と過ちの相対的区分にルターの思想は無関心であり、それは文化的曖昧さの問題を含んでいる、とニーバーは述べている。

社会生活の中で正義を確立するという問題との取り組み方では、ルター宗教改革思想は敗北主義的であった。社会生活の中でより高い正義を確立する可能性には不確定のところがある。正義のあらゆる体制は、人間の罪深さを前提に置いて、無政府状態に陥らないように利害の争いを防ぐ制約を設けている。神の王国や完全な愛が求めるものは、すべての政治体制に関連している。ルターは、この関連性を否定している。ルター言葉に依れば、福音を天国のものとし、律法を世俗のものとするようになるとして、律法と福音を区別している。よって、信仰に関する問題が生じた時には、律法を排除することとなる。市民生活では、律法の遵守が厳密に求められるが、そこでは、福音や恵みについては何も知られていない。ここで、恵みという究極の経験と、歴史の中で達成されなければならない自由と正義についての可能性との間に断絶が生じてしまう。ルターの主張に従うと、キリストは人間を社会に関してではなく、神の前で自由にした。人間の良心は、神の怒りを恐れることなく、自由にされている。社会的問題について律法不要論に陥らないように、すべての人間は努力することになっているが、友愛に合致したように社会構造を変える義務は、キリスト者には課されていない、となる。

農民戦争に対してルターは、「精神の王国」と「世俗の王国」とを区別して、社会正義を求める農民の要求に対して、農民が二つの王国を混同しているとして消極的な対応をした。ルターは、社会には主人と奴隸などは常に存在するものとして、封建制度が持つ社会的不平等を受け入れた。ルターは、「内的」王国と「外的」王国の区別をして、公的道義と私的道義の区別を導き出し、公的道義の管理者としての支配者は暴徒と対立する時には暴力を使うことができるという立場に立った。ルターは、無政府状態を恐れて、それを鎮圧する手段を認めた。農民は、私的市民として位置付け、山上の垂訓の倫理に従って生きることをルターは求めた。正義の要求は、聖書にある非暴力の倫理に反する、とした。

こうしたルターの主張に対して、ニーバーは、政治

に「外的」、そして、「世俗的」な倫理上の権威を認めることで、歪曲した社会的道義を導き出した、と論評している。ルターは、現実的な公的倫理に対比させて、完全主義の私的倫理を強調した。ルターは、国家に対して綿密な正義を求めることはせず、秩序の維持を求めた。個人に対しては、社会正義の要求に加わることはない、無抵抗の愛を求めた。ルターがこうした倫理を求めた結果として、暴政を促進することになってしまったというのがニーバーの見方である。ルターの悲観主義の立場に立つと、無政府が現出してしまいが、それを恐れる立場がその後のドイツの歴史を大きく変えることになった。ナチズムの悲劇は、暴政へのルターの無関心と関係があった、とニーバーは述べている。社会問題についてのルターの一面的解釈は、「より高度の力にすべての人間は従うべきだ」とするパウロの言葉をルターが強調したことから出ている。ニーバーは、こうしたルターの主張を過ちと捉えて、これがなかったとしてもルターの倫理の捉え方では政治の分野では敗北主義をもたらしたであろう、と述べている。ルターが「精神の」王国と「世俗の」王国と明確に区分したことは、良心への神の究極の要求と、歴史において善を実現する相対的な可能性との間にある緊張関係を台無しにしてしまうことになる。ルターの主張では、正義の段階的実現の道義的意義が二つの角度から否定されることになる。第一は、ルターの現実主義の側面からすると、すべての歴史的業績は罪で汚されているとされた。第二に、ルターの説く福音の完全さの側面からすると、すべての歴史的業績は、神の王国の完全な愛には及ばないということである。

ルターの宗教改革の思想は、品性のある行動を生み出す道徳的緊張を凌駕するところまで、宗教的緊張を高める危険性を示している。すべての人間の行いは罪で汚れているということで、良心は不安になるものであるが、それに代わるものも汚れているという信念は、不安な良心を途中で開放するものである。聖人でも罪に汚れることを厭わなくなり、罪人も人間関係をより正義に近くなるように努力する。社会生活におけるルターの思想の弱点は、相対的な正義のための基準を定義できないことである。ルターは、人間が至福になる愛として赦し (sanctification) を定義しているが、相対的な善悪の基準を示していない。ルターがカトリック程には理性を信頼しないことをニーバーは高く評価するが、社会的義務の合理的な分析のために「自然法」概念をルターが援用していることを問題視する。「自

然法」に代わる秩序の体系は、次の二つの考え方から出来ている。一つは、どんな国家も秩序や正義を何とか確立すると言うことである。もう一つは、「創造の秩序」という考え方で、神が世界を創造する時の指示を指す。この考え方の問題点は、人間の自由は創造の「任意」の事実を変化させるために、人間の組織は、「創造」の固定された原則では判断されないことである。「創造の秩序」の例として、父親と母親の生物学的な違いなどが挙げられる。一夫一婦制などはその中には入らない。政治の分野では、政府は「創造の秩序」に属するものと見なした。その権威は、「神の命令」から発している、とルターは考えていたようである。

3. カルヴァン派の宗教改革思想

ニーバーは、宗教改革思想の特徴として、超道徳主義 (supramoralism)、言い換えると道徳との取り組みの回避という考え方が持つ危険性を指摘し、新たな道徳主義の押しつけの危険性があると述べている。ピューリタニズムは、この危険性に陥った例と見なすことが出来る。宗教改革の思想が混迷した要因として、究極の問題に大胆に取り組みなかったことがある。歴史の中での善と悪の区別を正しく行うことは、簡単なことではない。こうした相対的な判断を、福音の中で述べられている生活と歴史についての最終的な真理に基づかせることは簡単なことではない。カルヴァンは、ローマ・カトリックの教義と対立した時、ルターの立場と区別が付けられない言葉で宗教改革思想を作り上げた。カルヴァンは、信仰の厚い人間によるどんな行いも、神の眼で見たら非難に値しないものはない、と述べた。カトリックの人々は、キリストへの信仰で神と和解した人間であれば、善い行いにより神と正しく向き合っていると見なされる、と考えた。

カルヴァンは、生まれ変わった人間の中にも悪の源は残り続けると信じていた。完全さと罪という複雑な問題についてのカルヴァンの見方でニーバーが最も優れていると見なしたこととして、聖人の完全さを認める時でも、その中に真理と謙遜さの両方で不完全さがあるという認識である。カルヴァンは、罪の浄化 (sanctification) について考える時に、カトリックのものほとんど違わない結論を導き出した。^{註6)}キリストと一体化することは、正義と罪の浄化の両方の意味を含んでいる、とした。カルヴァンは、人間の行いによる正義の達成という考えを拒否することは、人間の救いを善い行いに求めないと言う意味である、と考え

た。許される罪と致命的な罪の区別では、カルヴァンはカトリックの見方に近くなった。カルヴァンは、罪が浄化された状態とは、人間の肉欲が克服され、心が神の律法に従うようになることだとしていた。キリスト者が、罪の根本問題としての自己愛を理解しないで、すべての罪を肉欲に帰す時には、精神は打ちひしがれているのに心は悔い改めているという逆説的問題への取り組みが消失してしまうのではないかと、ニーバーは疑問点を指摘する。カルヴァンは、聖人は完全さを欠いているとしても本質的には正しい人であると信じた。キリストを信じる人は、正しさに到達することよりも、正しさの追求に献身するので、この正しさは信仰による義に従属する、とカルヴァンは述べている。

カルヴァンはキリスト者の浄化に確信を抱き過ぎたことをニーバーは過ちであったとし、それがカルヴァンの著作ばかりでなく、行動に於いても明らかにされていた、と述べている。カルヴァンが、罪を自己愛よりもむしろ肉欲から生じるものと定義したが、これが新たな自己正当化を導いてしまった。あらゆる欲望を一つの大きな目的に従属させるための厳しい生活は、あらゆる自己中心的な要素の一つの大きな目的から除外することよりも単純な可能性を持っているからである。カルヴァンのこうした見方の弱点が現れているものとして、ニーバーは、ピューリタンの自己正当化の歴史を指摘している。パウロは、信仰、希望、愛の三つの徳の内でも最大のもとして愛を位置付けたが、カルヴァンは、信仰によって正しいと見なされるのは少数の人であり、慈善は多くの人に当てはめられるとして、愛を信仰の下に位置付けた。カルヴァンが愛を信仰の下の置いたのは、異端に対する自らの姿勢を正当化するためでもあった。異端に対する冷厳な態度の中で、カルヴァンは、自己正当化の罪を生み出し、憐れみの欠如を明らかにした。選ばれた人の真の精神を表す「精神の絶望」を最後に証明するものとして、ニーバーは、憐れみと赦しの能力を指摘し、赦しを自らが必要としている意識がなければ、善良な人でも邪悪な人に対して憐れみを表すことが出来なくなる、としている。

恵みと律法との関係についてのカルヴァンとルターの捉え方の違いは、両者の神学の全般的な違いを表している、とニーバーは主張して、次のように説明する。カルヴァンは、道義主義を超越することよりも、律法主義を求める。カルヴァンは、罪の浄化を、あらゆる律法を超えることになる、愛の最上の経験として捉えることはせず、この点がルターとは異なっている。カ

ルヴァンは、律法に厳密に従うこととして罪の浄化を捉えている。罪深い状態にある魂は、完全なる律法を知らないの、聖書の中で示されている「神の法」によって導かれる必要がある、としている。人間の緩慢さのために助けが必要になり、聖書の中から人生を改めるための規則を見つけ出すことが必要になる、としている。カルヴァンの言う「神の法」とは、聖書の様々な箇所からの訓話を要約したものである。これは、カルヴァンの聖書中心主義の帰結としての倫理観である。ルターがキリストの中に聖書批判の原則を見て、愛の戒めが他のすべての戒めに優先すると考えたために、ルターは自分の神学でも倫理でも聖書中心主義の過ちに陥らずに済んだが、カルヴァンは、この両方で過ちを犯すことになった。カルヴァンの「神の法」という概念は、社会生活の分野ではルターの大雑把な概念よりも一貫性があるという点で優れているが、曖昧さと見せかけの過ちを表している。何が正しいのかを決定する時に、人間の理性を十分に活かしていない点で曖昧さを持っている。すべての社会問題への回答を聖書の権威に余りにも頼りすぎている。カルヴァンの倫理観では、キリスト者に対して道義的基準への過度の確信を与えている点で見せかけを表している。カルヴァンの倫理観は、聖書の基準を特定の問題に適用する時に出て来る判断の相対性や歴史的相対性を曖昧にしているところがある。

カルヴィニズムの歴史的意義として、ニーバーは、民主主義発展への貢献を挙げるが、それ以上の貢献を果たしたのがキリスト教諸セクトやルネサンスの運動である、としている。こうした運動は、カトリック程には明確ではないにしても、人間の理性の可能性と義務を理解していた。ルターは、正義の問題を罪深い人間の理性では解決出来ないと思なす一方、カルヴァンは、人間の罪深さで汚れていない超越的な基準に訴えることで簡単に解決出来るとした。

宗教改革の思想は、歴史を簡単に超越出来ることを主張するカトリック主義に批判をするが、カトリックとは反対の方面から同じ過ちを犯すことになった。よって、宗教改革の思想は、人間の経験に対して弁証法的な見方をしなければならなかった。例えば、キリスト者は罪人であると同時に正義の人であること、歴史は神の王国を完成すると同時に否定すること、神の恵みは自然と連続していると同時に矛盾していること、キリストは人間の理想の姿であると同時に人間は成り得ないものであること、神の力は人間の中にある

と同時に審判では人間と対立すること、などの見方である。これらの見方が、人生経験に適用されなければならない、と言うのがニーバーの主張である。神の王国の愛が関わらない社会正義はない。信仰によって人間が歴史や罪を超越することがあっても、それは、信仰の極みのものであり、人間がそれを身に付けたとする時には、汚れたものになってしまう。

4. 宗教改革思想とルネサンス思想の統合

近代への歴史の流れの中で、宗教改革の思想がルネサンス思想によって圧倒されてしまった理由として、ニーバーは、ルターの思想が持っていた敗北主義とカルヴァンの思想にある曖昧さへの傾向を指摘する。宗教改革思想は、罪の問題と、それへの恵みの究極の解答とを結びつけることが出来なかったために、歴史の中で真理を実現することの可能性と限界を明らかに出来なかった。ルターの敗北主義は、近代の楽観的な歴史観の中では受け入れられず、宗教改革思想の中にあった正当なものも排斥されてしまった。人生や歴史の究極的視点についての宗教改革の正しい見方が取り上げられず、その見方が文化や社会という中間の問題に結びつけられなかったことが強調された。

ニーバーは、近代の文化を再検討する時には、宗教改革とルネサンスの各々の正しい視点と、間違った視点とを区別することが重要である、としている。そのために前提となることとして、ニーバーは、次のことを指摘する。近代史の過程では、様々な宗教的、文化的運動の中で、律動的解釈が正当化され、楽観的解釈は排除された。これらの解釈は、ルネサンス思想の中で結実したものである。宗教改革の基本的命題は擁護され、社会という中間的問題では宗教改革思想の曖昧さと敗北主義が批判されてきた。そして、近代史の論理では、知識の増大と社会の複雑化が人間の成長と捉えられる一方、19世紀や20世紀の歴史の展開では、成長と進歩を同一視することが誤りであることが明らかになった。結局、歴史は自らを救済することが出来ないことを、近代の人間は学んだ。このことから、宗教改革の思想の中に新しい有効性を再発見することになる。つまり、福音の中にある真理は、人間の知恵の中にはないが、人間の知恵が限界を認め、絶望が信仰を促す時に、その真理が理解される。信仰が促された時に、その真理は人生や歴史を意味あるものにする知恵となることを、近代の人間は学ぶことになった。

キリスト教信仰が有効でないように思われたり、歴

史に幻滅を感じる時代がある。20世紀の人間は、希望の時代を経て幻滅の時代を経験するようになった。希望の時代にはキリスト教信仰が無力のものとなったが、幻滅の時代にキリスト教信仰が回復するかどうかは明確にはなっていない。近代の人間が人生に意味を見出せるようになるために、福音の真理を伝える人々は、大きな役割を負っている、とニーバーは言う。これまでの歴史の中にあった混乱から教訓を得るとしたら、それは聖書の預言的歴史観の中に見出せる。ここで、新たに統合された見方が求められている。それは、聖書の恵みについての二つの見方を統合し、それにルネサンス、宗教改革、近代の歴史が投げかけた新しい見方を加えたものである。

聖書の中での恵みの概念は、歴史の中では無限の可能性で満たされていることを認める反面、それを成就出来るとする見方は否認されなければならないことを意味する。ルネサンスや宗教改革を経た後では、中世のカトリック的統合に戻ることは不可能になっている。中世的統合が今日では妥当性を失っている理由としてニーバーが指摘するのは、それが恵みの二つの側面の妥協に基づいていることである。人生の成就についての中世的統合にある見方は、恵みの力を歴史的状況に限定したために、不十分な点が出て来た。恵みという概念は、人間のあらゆる可能性を超えた力と可能性を表すものであるが、中世的見方は神の自由を人間の限界の中に閉じこめてしまった。近代の社会倫理は、キリスト教会の力に挑戦し、社会正義を封建時代の社会条件との関連で規定して発展して来たために、近代文化は教会の見せかけに反発して来た。また、哲学や科学による真理の追求を人的権威が抑制するとしたら、信仰によって理解されるものを究極の真理とする見せかけも看破出来なくなる。

人間の知性は、無限の多様性を持った意味の体系を発見する。こうした意味の体系が、人間行動への貴重な指針となるが、そこから包括的な意味を引き出そうとすると、偶像崇拜と同じような事態となる。知識の自由な追求が、そうした事態を導くのは避けられず、キリスト教信仰により見出される意味の体系よりも優れたものを導いたとする哲学も出て来る。福音の真理に人的権威が介入する時には、偶像崇拜を導くのは避けられない。よって、文化が偶像崇拜の回避に傾注することは、賢いとは言えない、とニーバーは言う。過ちを抑えようとするとも真理も抑えられることになるからである。偶像崇拜に陥らないようにすることは、結

局失敗に終わる。人間が究極の真理と思われるものの中に現れる過ちを見つけるまで、福音の真理を擁護する方法がないからである。よって、キリスト教信仰は、中世の教会が確立した文化と信仰の統合の中で許された以上の自由さで、人間の文化が持つ力と関わらなければならない、と言うのがニーバーの意見である。

宗教改革思想は、文化という中間的体系を否認する傾向があるが、ニーバーは、このことを問題視する。近代のルネサンス的精神からすると、カトリックとプロテスタントが持っていた文化的曖昧さは同じように見える。しかし、両者が用いた文化への戦略は異なっていた。前者は、知識の追求に不当な制約を加えたために曖昧さが出て来た。後者は、思想や生活の問題に無関心であるために曖昧さが出て来た。これは、聖書の中で明らかになっている人生の究極の意味を、世俗の意味のすべての領域に当てはめたことから来ている。

ここで、文化とキリスト教信仰との間の思想的統合の問題が出て来るが、この統合を有効なものにするためにニーバーが指摘していることは、人間の直接的、間接的経験を抜きにして、究極の状況だけを想定してはいけないということである。人間は、社会的、道義的義務感から善のより高い可能性を実現しようとするし、歴史における善の限界を明らかにしようとする。人間は、答を求めて熱心にならなければ、人間存在の究極の問題を解くことは出来ない。究極の解答と、それに近い可能性とが絶えず結びついていなければ、人間は、究極の解答を受け入れる方法がない。この点で、ニーバーは、ルネサンス思想の見の方が、カトリックや宗教改革の見方よりも正しいところがある、と言う。思想的統合に向かって宗教改革の思想が貢献すべきこととして、人間は神の恵みか人間の能力によって人生や歴史を成就することが出来るとするカトリックやルネサンスの思想の見せかけを取り除くことである。宗教改革の思想は、ヘレニズムと預言主義の妥協で成り立つカトリック的統合が示す真理を超えた視点を持って、聖書の中で人生や歴史の真理を再発見したからである。

恵みの二つの側面、つまり人生を成就することの義務を強調すること、歴史の中でそれを実現することの限界を強調することの意味として、ニーバーは、次のことを指摘する。歴史は意味のある過程ではあるが、それを成就することは出来ないで、その成就に対して神の審判と憐れみを仰ぐことになる。キリスト教の

教義では、神の憐れみと神の怒りという逆説的な関係が説かれているが、これが人間の歴史の解釈の鍵になる。神の審判は、人間の歴史が善と悪の混じり合った深刻のものであることを象徴していて、善の実現への努力の重要性を指摘する。他方、神の憐れみは、歴史の中で善の実現の不完全さを指し示す。よって、憐れみがなければ歴史上の意味の体系は不完全になる。悔い改めというキリスト教の教義は、自信に満ちた人間には理解できないものであるが、人間の義務について、何を成すべきかということや何が出来ないかということを書いてある点で、人間にとっての知恵の始まりとなる、とニーバーは述べている。

Ⅲ. おわりに

以上、ラインホルド・ニーバーの『人間の本性と運命』第二巻第七章を中心にして、宗教改革思想の二つの大きな流れ、つまりルター派の思想とカルヴァン派の思想の特徴についてのニーバーの見解をまとめてみた。これにより、キリスト教神学とはどのようなものなのか、また、ニーバーの神学の特徴はどのようなものなのかの一端は紹介出来たと思う。ニーバーの思想はまだ十分に紹介し切れていないことが多いので、今後も続けて行くつもりである。

注

- 1) 佐久間重, キリスト教神学における歴史認識, —ラインホルド・ニーバーによる近代文化についての見解— 名古屋文理大学紀要第10号(2010年3月)参照。
- 2) Niebuhr R, *The Nature and Destiny of Man, II*, Charles Scribner's Sons 184-212(1943)を参照。Niebuhr R, *The Nature and Destiny of Man, I*, Charles Scribner's Sons (1943)の日本語訳として、『キリスト教人間観 第一部 人間の本性』武田清子訳, 新教出版社(1951)があるが、日本語訳でも難解である。
- 3) ルター の 思想 について は, Martin Luther, W. A. Lambert (Translator), *On Christian Liberty*, Augsburg Fortress Publishers (2003) を参照。
- 4) Rudolf Otto, Bertha L. Bracey(Translator), *Mysticism: East and West*, Kessinger Publishing(2003)を参照。
- 5) Emil Brunner, *The Divine Imperative*, Westminster John Knox Pr 72-78 (1979)。ブルナーの神学はニーバーのものと比較され、さらに彼らの神学は、

同時代の神学者であるバルトのものと度々比較されて来た。ブルンナーの神学が社会的な関わりに対して消極的であることをニーバーは批判するのであるが、同様の視点からバルトの神学も次のように批判している。バルトの神学は「第一次大戦の経験により近代文化への反動として生まれたが、ニーバーは、この神学の問題点が、ルネサンスは全く間違っていて、宗教改革は全く正しいとされていることにある、としている。さらに宗教改革を強調しすぎたために、宗教改革の思想の中にあつた罪の浄化や人生の成就という概念をも押さえ込まれてしまった。」(佐久間前掲論文)。

- 6) カルヴァンの思想については、Jean Calvin, *Institutio Christianae Religionis*(1559) により参照可能であるが、ラテン語によるものであるために、ニーバーの言説に従った。日本語版としては、次のものがある。J・カルヴァン、『キリスト教綱要』(渡辺信夫訳) 新教出版社(1959)。